

後國の產なりと丹洲圖竹いひ、また琉球より來りしものなりとも本草綱目啓蒙いへり、所謂江戸にあるものは、その高さは九尺より一丈許に至り、每節相去る事三四寸にして、いづれの節間にも、上によりて細澀砂ありて、砂紙を摩するが如し、また地上より一二節には、周圍に細小根つらなり生じて、それより以上は毎節すべて細小根となるべきもの、皆突起して頗る黍粟の類をならべたるが如く、粒々まばらに付て、その先或は尖りたるものあり、その所より切て二三節をこめて、地中に插置ときは、をのづから黍粟狀の如きもの延び出て、遂に細小根となるといへ共五月の比の梅雨亥きりに降つゝきぬる時にあらざれば、大方は根付、難きものなり、扱此枝は根上十二三節にて、始めて獨枝を生じ、それより雙枝三枝となりて梢上に至る、これ新竹の形狀なり、年を経る時は、その枝節よりまた二筍三筍を抽出て、五枝六枝或は七八九枝をも叢生す、その葉の狀矢竹に似て、極めて細く、長さ五寸餘、廣さ五分計にして、葉先最細尖なり、新枝は四葉三葉を一朶とし、舊枝は五葉六葉或は七葉を一朶とす、その葉先に至りては、皆二葉相對して、正に木槐子葉の葉先の如し、此筍秋末より生じ、冬に至りて成長す、その籜すべて紫色なる小斑點ありて、愛すべく味またよし。

古今要覽稿 草木 瑞琨竹

瑞琨竹は今駿河國藤川の傍なる木島郷にあり、即ま竹の一種、斑文ありて最長大なるもの也。中略或人の其地に至る時、土人此幹を擧て簾となし、蛇籠を作りて藤川に於て、洪水を遮ぎりしといへり、かゝる奇竹を以て尋常の用に供するものは最おしむべし、扱此瑞琨竹は舊より駿河國にのみ産して、その他諸國またこれある事なきを以て、諸家本草絶て此竹を載せず。

玳瑁竹 紫第竹

玳瑁竹は漢名を紫芻竹といふ、其高二尺許、葉は熊笹に似て、細小にして長八九寸、廣さ一寸餘、其